

---

# 心をつなぐ愛の糸【平沢 憂の物語】

Tomokazu

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

心をつなぐ愛の糸 【平沢 憂の物語】

### 【Nコード】

N9811V

### 【作者名】

Tomokazu

### 【あらすじ】

本小説は『けいおん!』の後日談という設定ですが、実は僕の前書いた二次小説『水の螺旋』（<http://ncode.yosetu.com/n2087r/>）の続編として書かれています。

ですので、原作の方とは若干設定が違う部分があると思います。

今回の主人公は前作の主人公・唯の妹である平沢 憂。

憂は姉に対するやりきれない想いを抱え、ひとり電車を乗り継いで、知らない田舎町へと旅に出る。そこで彼女は何を経験し、何を学んでゆくのか。そして、姉に対する気持ちは、どのように変わるのか。

『水の螺旋』で描き切れなかったテーマを、ココで書いてゆくつもりです。

## プロローグ

(プロローグ)

今日の天気も晴れです。

また普段と変わらないであろう一日が始まります。

ありふれた、平凡な一日。何て安心感のある、素敵言葉なのでしょう。当たり前前に受け取られがただけれど、実はその当たり前を過ごせることこそが、私たちにとっては本当に幸せなことなのです。

とはいっても、私ができることに気づいたのは、ほんの数ヶ月前。4月から5月にかけてのことです。あの時は本当に大変でした。大学に入学した早々にある出来事が起こり、その出来事がどんどん派生して、とんでもない事件へと発展したのです。

何とか苦難を乗り越え、私たちはこの平凡な日々を取り戻すことができました。しかし、実を云うと私には、この感謝すべき幸せな日々が何だか、物足りない気がしてならないのです。それはあの時の事件があまりに印象的だったからです。スリルを一度体験した人は、スリルを追い求めないと気が済まなくなる、などと云いますが、それと同じようなものでしょうか。いいえ、私にはあの日々はもつと別な、特別な意味合いをもっているのです。つまり、私はその時に、私にとっては非常に重大な、大きなアプローチをし、ほぼ同時にそれに対する“応え”も得たのでした。

そのアプローチとは、私のお姉ちゃんに、私の気持ちを伝えよう

としたこと。そして、その“応え”とは、その気持ち、お姉ちゃんには伝わらなかったこと…。

おそらくお姉ちゃんは、私がお姉ちゃんにどんな気持ちを伝えようとしたことすら、分かっていないでしょう。でも、その直後にお姉ちゃんに生まれた感情やとつた行動は、実は私にはとてもシヨックなものでした。いいえ、妹としては喜ぶべきなのかも知れませんが、お姉ちゃんが初めて自分の気持ちに気づき、そしてその想いに向き合った瞬間なのですから。

回りくどい言い方はやめて、ハッキリ云いましょう。私はあの時、お姉ちゃんに口づけをしました。しかし、お姉ちゃんは私の本当に気持ちには気づかず、別の男性に告白し、そして自ら彼の唇に、自分の唇を重ねたのです。

彼は、お姉ちゃんにはお似合いの男性だったと思います。多少クセのある人で、嫌う人も多かったようですが、私は決して嫌いではありませんでした。むしろ、多少好意的に見ていたと思います。それは、彼を愛したお姉ちゃんと同じ遺伝子を、私も受け継いでいるからかも知れません。それに何より、彼は心からお姉ちゃんを守ろうとしてくれているように感じました。実際、彼は自分の身を犠牲にして、お姉ちゃんを助けたのです。これは、お姉ちゃんが彼を好きになっちゃんっても、おかしくないですよ。

だから、お姉ちゃんが彼に告白したことは、何の問題もない、むしろ喜ばしいことだと本当に思います。でも、やっぱり私には一抹の寂しさを、自分の想いが潰れてしまった悲しさを、感じずにはいられませんでした。そして、お姉ちゃんが結局彼と別れる道を選択したのには、実は私はほっとしました。つくづく自分を嫌な人間だと思えます。

あ、因みに、先ほど『お姉ちゃんが彼の唇に自分の唇を重ねた』  
と云いましたが、お姉ちゃんはそのことを私や他の仲間たちには内  
緒にしているようです。でも、妹である私には、お姉ちゃん表情  
を見ただけでそんなのすぐに分かるんですよ。

まあ、そんなこんなで、今の私の気分は憂鬱で、そしてそんな自  
分にちよつと自己嫌悪なのです。そんな私にも、神様は平凡な幸せ  
な日々をくださいます。とても、有難いことです。でも、また私の  
この憂鬱な気持ちを吹き飛ばしてくれるような、劇的な出来事が起  
こらないかな、と罰当たりなことを思ったりもするのです。

とにかく、そんなところから、私、平沢 憂の物語は始まるので  
す。

## 第一章・旅に出る ( part . 1 )

(第一章 「旅に出る」)

1

「うわあ、散らかってるなあ。お姉ちゃん、片づけとくね」

お姉ちゃんの部屋に来た早々に、私は云いました。

「うん、ごめんね、憂」

お姉ちゃんが少しすまなさそうに云います。私は「いいんだよ」と返しました。こうやってお姉ちゃんのお世話ができる時が、私にとっては本当に、至福の時間なのです。

1、2週間に一回は、こうやってお姉ちゃんの部屋に遊びに来る時は、部屋を片づけたり、ゴミを捨てたりと、世話を焼いて帰るのです。その代わり、たいていお姉ちゃんは、私に料理をふるまってくれるのでした。実家にいる時は、ほとんど料理なんてしたことなかったお姉ちゃんですが、ひとり暮らしを始めてから、少しずつ覚えていったみたいです。でも、それでもまだ私の方が料理の腕は上かな、なんて思います。あ、これは秘密ですよ。

部屋を片づける手を止めて、ふと後ろを見ると、お姉ちゃんが台所に立って、料理を始めていました。台所といっても、部屋の片隅に備え付けられた、流しとコンロぐらいしかない小さなものです。不便そうですが、ひとり部屋なので仕方ないでしょう。そんな小さ

な台所で、お姉ちゃんは慣れない手つきで調理をしています。本当に微笑ましいです。お姉ちゃんには悪いけれど、子供の成長を見守る親の気持ちって、こんなものなのかも知れません。

けれど、そんなお姉ちゃんの横顔は、とても憂いのある、大人びたものでした。ほんの少し前まで、行動も性格も外見も、本当に子供っぽかったお姉ちゃんですが。一度の恋愛が、こんなに人の姿を変えちゃうんだなあ、としみじみ思えてしまいます。

「あれ、憂どうしたの？」

お姉ちゃんがこちらを見て云いました。私は、しばらく手を止めて、お姉ちゃんの横顔を眺めていたみたいです。

「あ、うん、何でもないよ」

私はそう答えて、自分の作業に戻りました。手を動かしながら思います。見入ってしまいました。見とれてしまいました。お姉ちゃんの横顔に。そっくりとよく云われていた私たち姉妹ですが、今ではお姉ちゃんの容姿があまりに大人びて、私が子供っぽく見られてしまうことでしょう。お姉ちゃんはいつでも私の一歩先を歩いてゆきます。私にはそれがとても寂しいのです。まあ、仕方ないことなんですけどね。だって、お姉ちゃんはお姉ちゃんなんですから。

そうこうしているうちに、片づけもひと段落つき、お姉ちゃんの料理も完成したみたいです。料理といっても、パスタとサラダぐらいの簡単なものでしたが。あんな小さな調理場では、仕方のないことです。

小さな丸いテーブルを囲んで、お姉ちゃんの作ってくれた料理を、



ふたりで食べます。

お姉ちゃんの料理の腕はだんだん上がってきたように思います。

食事をしていると、ふとお姉ちゃんが私に話しかけてきました。

「ねえ、憂。大人になったら、私、何をしているのかな」

「えっ、大人になったら？」

私は聞き返します。

「うん。私、来月には20才になるでしょ。なのに、まだ気持ちは子供のままのような気がして。将来何をしているのか、何をやるべきなのか、全然イメージできないの」

子供だなんて。私に比べたら、全然大人なのに。

「漠然と大学院に行こうかな、なんて気持ちもあるけど」

「えっ、大学院に？」

「うん。凜くんも行ってんし」

“凜”、お姉ちゃんが恋した男性の名前です。

「大学院に行って、後はどうしたいの？」

私は訊きます。

「うーん…、分からないや」

「あのねえ、そういうのは、ちゃんと考えた方がいいと思うよ。それに、お姉ちゃんが本当にその進路に進みたいと思っっているならいいんだけど…」

ここから先は、お姉ちゃんには少しキツイ言葉かも知れないと思いながらも、私は続けました。

「何だかお姉ちゃん、凜さんへの気持ちをずっと引きずっているように思える。そりゃ、お姉ちゃんにとっては大切な思い出かも知れないけれど、そろそろ未来も見なきゃ」

案の定、お姉ちゃんは少し辛そうに俯きました。

「分かってる。だけど、凜くんはもう、私のことを思い出せないんだよ。だからせめて、私が彼のことを覚えていてあげないと…」

お姉ちゃんと凜さんには、辛い別れがあつたのです。だから、お姉ちゃんが彼への想いをずっと心に残しておくことは、お姉ちゃんにとってせめてものなぐさめなのです。それは分かっています。いえ、完璧には分からないかも知れないけれど、分かるうとしていっつもりです。けれど、お姉ちゃんはそれを、自分に課せられた使命だと、強迫観念的に思い込んでいるふしがあるのです。そしてこのままじゃ、お姉ちゃんは自分の幸せを逃してしまいそうな気がするのです。

「でもそうだよ。確かに憂の云う通りだよ。でも、どうしたらいいか、自分でも分からないの。凜くんを忘れるなんて、そんなことできないし…。ねえ、憂、どうしたらいいのかな、私」

「どうしたらって…、そんなこと分からないよ」

私の突き放すような言葉に、お姉ちゃんは少し驚いたような顔を  
し、そしてすぐにそれは悲しそうな表情になりました。どうやら、  
お姉ちゃんは私を何でも頼れる相手と思ってくれているのです。そ  
れはそれで、嬉しいことではあるのですが、今やお姉ちゃんは、私  
よりも遠いところに行ってしまった。今、私にできるのは、こ  
うやって身の回りのお世話をしあげることぐらいで、精神的な支  
えになったり、または将来に対するアドバイスなど、できるような  
立場ではなくなってしまったのです。

「憂…」

「そんなこと、自分で考えるべき問題でしょ！」

私は少し苛立って、お姉ちゃんのすぐるような言葉を払いのける  
ような、ピシヤリとした言葉をお姉ちゃんに浴びせてしまいました。  
そして、そんな自分に対しても、とても腹立たしい気持ちになりま  
した。この世で最も愛する姉に、こんなひどい態度をとってしまう  
なんて…！

「ごめんね。でも、私には何もできないから…」

その後、私はそう云うのがやっとでした。

「ううん。憂の云う通りだよ。これは、私自身の問題。自分自身で  
解決しなきゃ…」

お姉ちゃんはそう云ってくれましたが、私は自分が心底イヤにな  
りました。お姉ちゃんにこんなに悲しい思いをさせてしまった自分  
に。何とか、お姉ちゃんを元気づけたいと思いましたが、無理でし

た。いったん出てしまった言葉を別の言葉で消すことなんて、できはしないのです。

それからの私は、ただ黙って、お姉ちゃんの作ってくれた料理を美味しくいただくことしか、できませんでした。

翌朝、私は電車の中にいました。とはいっても、どこかに向かっていたわけではありません。昨日のことがどうしても忘れられず、いてもたってもいられなくなって、気がついたら電車に乗っていました。ただ遠出をしたい、それだけが理由です。背中にこびりつくこの悲しさ、寂しさ、後ろめたさが、追ってこれない所まで。

乗り換えを繰り返して、何時間も電車に揺られ、下り立ったのは、都会とは大きく離れたへんぴな駅でした。ホームから階段を下りて改札へ向かいます。ちょっとびっくりしました。私の住む都会の駅では、改札には自動改札機が数台は並んでいるのですが、この駅の改札には自動改札機がありません。ただ通路があり、壁際に駅員さんの窓口があるのみです。どこまで行くのかも決めていなかったのに、切符は最短距離までの額しか買っておらず、のりこし精算をしなければならぬのですが、その精算機もないみたいなので、改札まで行って駅員さんに頼んで、精算してもらいました。4000円ぐらい払いました。

改札を通ると、待合室のようなところに出ました。待合室のガラス窓から外を眺めます。さびれた町並が見えます。都会に住んでいる私にとって、このような町の風景は、とても新鮮に映ります。

ふと、思いました。さらにこの先には、どんな風景があるのだろう、と。もう少し電車を乗り継いでみたい、と。それで、壁に付け

られている時刻表を確認します。次の電車が来るのは…、一時間半後！？

都会とは違って、このような所では、電車の頻度も1時間に1、2回になるみたいです。

こんなところで、何もすることもなく一時間半も待つのか？と、私は少し気が重くなりましたが、仕方ありません。私は待合室の座席に座りました。

ふいに、制服姿の高校生のカップルが入ってきて、私の横の席へ座ったと思ったら、腕を絡めたり手で身体に触れ合ったりしながら、おしゃべりを始めました。ふと私は、その姿にお姉ちゃんと凜さんを重ね、嫌な気分になりました。嫌な気分から抜け出さたくて遠出してきたのに、またそんな気分になってしまったては意味がありません。大好きなお姉ちゃんのことさえ、今は考えずにいたかったので。私は、ホームに向かうことにしました。券売機で切符を買って（券売機はあったのです）、改札で駅員さんにハンコを押してもらって、階段を上ってホームまで出てきました。

さあ、ここから1時間以上も、どうして過ごせばいいのでしょうか。などと思っていると、ふと遠くの方から、電車が来るのが見えました。通過電車かな、などと思っていたいましたが、その電車はホームに近づくにつれ徐々に減速を始め、ホームで緩やかに止まり、私の目の前で扉が開きました。あれ、何でこんな早くに、と一瞬疑問に思いましたが、遅れてきたのかなと思いついて、私は電車に乗りこみました。

扉が閉まり、電車が発車します。都会ではあまり見られない、一両編成の電車でした。運転席と客席は、はっきりと区切られておらず、運転席の隣には料金を徴収するための機械。運転席の上の壁に

は、料金表があります。何だか、バスみたいです。これが田舎の電車なのかという、新鮮な驚きがあります。

さらに意外だったのは、私意外に乗客がいなかったことです。ガラんとした電車に、私はひとり揺られていました。窓から外の景色を眺めれば、本当に田舎の風景。整備されてない道、田畑、ぼろぼろの小屋なんかが目に入ってきます。

しばらく電車に揺られていると、とある駅へ着きました。どうしてでしょう、私は何となくこの駅が気になりました。どんな場所なのか下りてみよう、そう思いました。どうやら無人駅らしく、電車の中でのりこし精算や切符回収してもらわないといけません。私は、足りない分のお金と切符を、料金徴収用の機械の中に入れ、電車を下りました。ホームからは、木造の階段が続いています。私はその階段を下り、このへんぴな田舎町へと降り立ちました。

この田舎の町をぶらぶらと歩いてみます。日本風の大きな家を通り過ぎれば、荒れた土地が見えたりと、そんな感じの町並み。はるか遠くにはうつすらと、山が連なって見えます。しばらくそんな風景の中を歩いていると、前方に山道がありました。

山道を上ってゆくと、途中右側に小さな神社を発見しました。何となく興味をもったので、鳥居をくぐって石の階段を上ってゆきます。上まで来ましたが、特に何も無い、小さな小さな神社でした。ただ、真ん中にドンと、木造の建造物があり、その台の上に、紙とペンが置いてあります。見てみると、どうやら参拝者が名前を書く紙のようでした。せっかく来たんだし、名前ぐらい書いていこうかな、私はそんなふうに思って、ペンを手に取り、紙に『平沢 憂』と書きこみました。

次の瞬間、クラツと、世界が揺れました。目まいでも起こしたようです。思わずその場にうずくまりましたが、思ったよりも早くに目まいは治まりました。

「何でこんな時に目まいが…?」

私は眩きました。それに、何だか少し違和感のある目まいだったような…?

違和感は気のせいということにして、私は境内を下りました。



山道はまだ続いていますが、このまま上り続けても、あとは森に入るぐらいじゃないか、という気がしたので、私はもと来た道を引き返すことにしました。道を下って、平らなところに出て、はっと異変に気づきました。向こうに、藁ぶき屋根の家がたくさん建ち並んでいます。来た時は、たしかあんなに家はなかった。しかも、藁ぶき屋根の家なんて。

そう思っていると、各々の家から、たくさんの人々が出てきました。みんなぼろぼろの着物を着て、ぞろぞろとこちらに向かって来ます。人々はみんな、何か棒状のものを手に持っていました。何かな、と思っていました。人々がある程度こちらに近づいてきて、分かりました。人々が持っているもの、それは、斧や鍬や鎌、そういった類のものでした。彼らの目は丸くくぼんでいて、穴ぼこのようです。そのたくさんの方の“穴ぼこ”が、こちらを睨みながらやってくるのです。

私は「逃げなきゃ」と思いました。しかし、足がすくんで動けません。例の“穴ぼこ”に睨まれたことで、自己防衛の本能が少し奪われてしまったようです。どんどん人々は私に迫ってきます。どうしよう、と私は思いました。

いきなり手を掴まれました。はっと横を見ると、着物を着た私と同じくらいの年頃の男の子が、私の手を握り、「こっちだ」と云って、私を引っ張りました。私は彼に引っ張られるまま、下りてきた山道を再び上っていききました。

「は、速いよ…」

彼がかなり速いスピードで上ってゆくの、私の息はもう切れて

しまっています。

「頑張れ。追いつかれんぞ」

彼は振り返ってそう云いました。後ろを振り返ると、人々もこの山道を上ってきています。確かに、頑張って走らなければ、マズそうです。だから、私も頑張って走りました。例の神社を越え、山道のでっぺんまで来ました。そこから少し平坦な道になります。平坦な道を少し走ったところで、私の手を引く男の子は、ふと方向を変え、横の鬱蒼とした森の中へ私を連れ込みました。私たちは木々の間をしばらく走りました。すると、目の前にやや横長の大きな岩が見えました。私たちは、その岩の裏側に駆け込み、岩場に身を潜めます。

私は荒い息をついていました。急に走ったので、若干吐き気もします。隣の男の子の息も荒いです。

「ここまで来れば、もう大丈夫だ」

そう云う男の子に、訊きたいことはたくさんありました。

「…あ、あなた、誰？ いったい、何が、あつたの？」

私は息も切れ切れに云いました。

「自己紹介が遅れたな。俺の名前は、やどがきな寄刀 けい継だ」

「ヤドリキガタナ ケイ…？ 長い名前ね」

私は少し顔をしかめて云いました。

「名字が云いにくけりゃ、下の名前で呼んでもいい」

「じゃあ、継くんがいいのね」

念を押すように私が訊くと、継というらしいこの男の子は、何も云わずに軽く頷きました。私は気持ちも息も少し落ち着いたので、そんな継くん少し突っ込んだ感じで質問を試みました。

「あなたが誰かは分かった。で、もうひとつの質問にも答えて欲しいのだけれど。いったい、私たちに何があったの？ さっき私たちを追ってきた、あの人々は何？」

「あいつらは、いわゆる“幽霊”みたいなもんさ」

「幽霊!？」

驚いて、私は思わず継くんの言葉を反芻します。

「まあ、厳密には幽霊とはちょっと違うかな。この土地に来て、夢も希望も、意志さえも捨て、魂を失っちゃった連中さ。あいつらの目、普通の生きた人間の目じゃなかったら」

「うん。穴ぼこみたいだった」

私は同意します。

「だろ。あいつら、この土地に迷い込んできた人間を、自分たちの仲間にしようと躍起になってるのさ。だからあの時も、お前を襲って、魂を抜きとろうとした」

「ちよ、ちよつと待って」

私は手を挙げて訊きました。

「だったら、継くんは何者なの？ 見たところ、継くんの目は普通っぽいけど。あの人たちとは違うの？」

継くんは、フン、と鼻で笑ってから、答えました。

「あいつらと俺とはまったく違うさ。こんな土地にいても、俺は自分の魂は自分のものだと思ってるんでな。失うつもりもないし、ましてやあいつらに奪われたりなんて、まっぴら御免だ。この俺のように、この土地にいなながらも、魂を奪われないよう必死で戦っている連中は、若干だが存在する。云ってみりゃあ、俺は連中をまとめるリーダーってわけだ」

私はふと疑問に思いました。継くんの話が本当だったとして、魂をあの人たちに奪われたくないのなら、この土地から離れたらいいのに、どうしてそうしないんだらう、と。

「でもそれなら、戦うよりはいつそ、この町から逃げたらいいのに……」

私がそう云うと、継くんは不思議そうな顔で私を見ました。

「何云ってんだ？ そんなことできるわけないだろう。現世うつしよを捨ててきたんだから」

…

ここは、現世に絶望し、その世界での生活を諦めてしまったり、捨ててしまったりした人が迷い込む世界。絶望する理由は人によって色々あるそうです。財産を失ったり、愛する人を失くしたり、夢や目標を失ったり、自尊心を失ったり… まあ、おおかた共通して云えることは、何かを“失う”ということだそうですが。とにかく、何かを失って、いったんこの世界に迷い込んでしまった人は、二度と現世には戻れません。なぜなら、大切なものを失ってしまったわけですから、もうその人は、現世に還る理由がないのです。要はこの世界に“迷い込む”というのは、現世から“逃げ込む”ということのほぼ同義なのです。しかし、多くの人はこの世界に逃げ込んでも、希望は見えません。なぜなら、失ったものが取り返せるわけではないですし、この世界は外との関係を一切遮断した、ちっぽけで無味乾燥なところですから。そんな世界で、人々は希望を失いやがて心も荒み果てて、魂を捨ててしまうのです。魂を捨てたもの同士は仲良く集落を作って、待っているのです。新しくこの世界に迷い込んでくる人を。そして、その人を襲って魂を抜きとり（そのために最初に行うのが、斧や鎌でその人をいったん殺すことだそうです）、自分たちの仲間にしてしまうのです。ただし、こんな世界にやって来ても、自分の魂だけは失いたくないと思っている人もいるのだそうです。そのような人たちは、結託して魂を奪おうとする人々と戦い、こんな世界でもそれぞれの生きる意味を確かめながら懸命に生きようとしているのです。

…

以上、継くんのお話の要約です。

信じる、信じないはともかく、継くんのお話は、常識では語るこ  
とのできない、とても現実離れしたものです。それはそれで、私の  
望んでいたものかも知れません。私には、平凡な日々には飽き飽きし、  
劇的な変化を望んでいるくらいがありましたから。しかし、そんな  
ことも私の心に強く響いた感情がありました。それは

私、還れないの？

ということでした。

「…嘘でしょ」

私はぼつりと云いました。

「何がだ」

「…還れないなんて」

「本当の話だ。実際俺が知っている中で、現世に還った人間はいね  
え」

瞬間、私の胸の中の感情が一気にバーストしました。

「嘘よ、嘘よ、嘘よ……！！ 私現世に絶望なんてしてない。楽しく過ごしているし、愛する人だっている。私がこの世界に迷い込む理由なんてないの！ ましてや、向こうの世界から逃げ出そうなんて……」

ここで、言葉が詰まりました。心の中の大きな矛盾を見つけたような気がしたからです。『絶望なんてしてない』、『愛する人だっている』、先ほどの自分の言葉を反芻します。本当にそうでしょうか。私は殆ど衝動的に電車に乗り込み、電車を乗り継いで、こんなへんぴな土地にやってきました。それはなぜでしょうか……。それは、「お姉ちゃんに好きな男性ができてしまったから」。「自分の想いがお姉ちゃんに伝わらないのが悲しかったから」。「お姉ちゃんの心の中に、ずっとその人が住み続けているのが、妬ましかったから」。そして、「そんな風に思ってしまう自分に、嫌気がさしたから」……。つまり、自分では気づかなかったものの、本当は“愛する人”とさらには“自分自身”に絶望感を抱いてしまったのではないのでしょうか。そして、私はもとの場所から逃げ出すようにして、この世界へやってきました。いいえ、“逃げ出すように”じゃないですね。“逃げ出して”きたのですね。

つまりは、私がこの世界に迷い込んだのは、疑問を差し挟む余地のない、ごくごく当然のことなのです。でも、それが当然であったとしても、私の胸の中の未練は消えません。その“未練”は胸の中に広がって充満し、空気が漏れるように、私はその思いを呟きました。

「…嫌だよ。還りたいよ。みんなに、お姉ちゃんに、会いたい…」

私は泣きだしてしまいました。考えてみれば、絶望した人に会いたいだなんて、おかしい話ですね、ほんと。

或いは、継くんの現実的に見れば荒唐無稽な話をその場で鵜呑みにして、シリアスになってしまうこと自体、滑稽な話かも知れませんが、信じないとまではいかないにしても、多少は疑ってみるのが、筋というものでしょう。継くんが表面上はまじめな顔をして、心の中で舌を出しているという可能性もあるのですから。疑うことを忘れるなんて、理学系の学問を学んでいる人間としては失格です。まあ、裏を返せば、この時の私はそれだけ精神的な余裕がなかったということなんです。

でも、結果論で話をしますが、この時継くんは、嘘なんてまったくついていなかったのです。私はそのことをこれから、嫌というほど思い知らされることになるのでした。



1

継くに連れられて、やってきたのはボロボロな木造の家でした。何でも、ここが継くと彼のお仲間たちが住む共同住居なのだそうです。

継くんが戸を開けました。中は薄暗く、とても埃っぽいです。継くんがまず中に入り、振り返って私に「入れ」と促しました。正直、こんな場所に入りたくありませんでしたが、わがままも云っていません。私は覚悟を決めて、家の中に入りました。

中には、男の子が10人ほどいました。みんな継くんよりも年下のようです。

「おい。今日から新しい仲間ができたぞ」

凜くんがみんなに向かって云います。男の子たちは、いつせいに私の方を見ました。

「お前、自己紹介ぐらいしとけ」

継くんは、私に向かって云います。

「ひ…平沢 憂です。よろしく」

私は少し慌てて云いました。

「へえ、女か。珍しい」

「兄貴のコレか？」

継くんは、この子たちから『兄貴』と呼ばれているみたいです。それにしても“コレ”って……。

「馬鹿云ってんじゃない」

継くんは一言ピシヤリと云ってから、私の方へ振り向き、

「今日からお前はココの住人だ。ここに住むからには、家での役割を決めて、働いてもらう。役割については、また教えるからな」

と云いました。

けれど、私はこんなところでずっと住むなんてやっぱり嫌です。この家があまりにボロボロで埃っぽいからという理由もあります。しかし、何よりも私は還りたいのです。お姉ちゃんに、また会いたいのです。矛盾した感情かも知れませんが、これだけは本当の願いであるという自信があります。

(何とか還る方法はないものかな)

私は密かに、そう思っていました。

第二章・知り合う ( part ・ 2 )

2

夜も更けました。

晩ご飯の時間です。

誰かがろうそくに火をつけました。暗くて人の顔もはつきりと見えなかった部屋が、いく分か明るくなります。その明かりの中で、ささやかなディナータイムというわけです。

この時間まで、私はこの家の男の子たちに、質問攻めに遭っていました。女の子が珍しいとみえ、どこから来たのだとか、どうしてここに来たのだとか、住んでいた町の様子はどんなだったとか、興味津々な目で根掘り葉掘り訊いてくるのです。もともと私は、人と接するのが苦手なタイプではないのですが、これだけの人数を相手にしてさすがに疲れました。これでやっと落ち着けるかな、と少々安心していきます。

家の住人たちは、円になって座っています。目の前には、小さくて粗末なお椀に、ご飯とおかずが、それはまた粗末な盛り方で入っています。見た目は悪いですが、果たして味はどうでしょうか？

継くんの「いただきます」の号令とともに、みんな箸を手に持って、ご飯を食べ始めました。私もそれに倣います。そして、ひとくち、目の前のおかずを手をつけました。

「…まずい」

思わず声に出してしまいました。本当にたとえようのないまずさでした。食べる前は見た目が悪くとも、意外に味は悪くないかも、なんて淡い期待もしていたのですが、見た目以上に味は悪いです。

周りの男の子たちが、いつせいにこっちを睨みます。しまった、と思いました。云ってしまったものは仕方ありません。何より、このとき私には、“こんなところで住んでいて、食までこんな状態ではいけない”という気持ちが芽生えていました。私は瞬時に覚悟を決めました。

「お前、今“まずい”って云ったな」

継くんが云いました。

「うん。云った」

私もあえて毅然とした態度で答えます。

継くんは、ひとりの男の子の方へ顔を向け、

「おい、お前の作った飯、まずいんだってよ」

と云いました。

継くんの視線の延長線上に、ひとりのやや肉づきのいい男の子が、つらそうな顔で俯いて、肩を震わせています。

「で？ まずけりゃどうなんだ」

凜くんは挑発的とも思えるような口調でそう訊きました。

「その前に訊いたときたいんだけど、いつもこんな料理を食べているの」

「ああ、料理担当はコイツだからな」

継くんは、料理を作ったという男の子を指さして云いました。

「分かった」

私はそれからひと呼吸おいて、

「明日から、私がみんなのご飯を作るよ」

と答えました。そして、料理を作ってくれたという男の子をチラリと見て続けます。

「ごめんね、君にはとてもキツイことを云うけれど。みんな、こんなもの食べてたら、ダメだと思うの。だって、食は生活の基本ですよ。その食がこんな有様じゃ、生きる希望も活力も湧かないんじゃない？」

私の口から“食が生活の基本”という言葉が出たのは、お姉ちゃんの影響だと思っています。お姉ちゃん、食べるのが大好きですから。それにしても、我ながらよくもこんなに酷いことを云えたなあ、と思います。でも、その反面、私は思っていたのです。どうか彼らに生きる希望を失わないで欲しいと。これからも、懸命に生きていて欲しいと…。

私の発言を受けて、継くんが云います。

「分かった。そこまで云うなら、お前にはうまい飯を作る自信があるってことだな。お手並み拝見といこうか。それはそれでいいが、さて、コイツはどうしようか」

継くんは再び料理担当の男の子を見ました。

「コイツ、何をやってもダメなんだよ。この家に住むには、何か役割を持って、みんなの役に立ってもらう。これがこの家で決められた鉄則だ。だが、コイツは何をやらせても上手くできないどころか、みんなの足を引っ張ってばかりいる。最後のチャンスとして、料理をやらせてみたんだが、それもダメとなると…」

次に継くんから出た言葉は、重たくて残酷な響きをもつものでした。

「…ここから出てってもらうしかねえな」

えっ…、そんな。私の発言で、こんな重大ことになるなんて、思ってもいませんでした。例の男の子は、悲しそうな目をして俯いたままで。他の男の子たちは、ずっと黙ったままで、何を考えているのかも分かりません。

「悪いな、色々情けもかけてやったつもりだが、これ以上お前をここに置いてくわけにはいかない。飯も、てんでまずいと思いなから、みんな我慢していたんだよ。しかし、こうなった以上は、お前に飯づくりを任せることもできない」

継くんがそう云うと、その男の子はぼつりと云いました。

「いいよ。俺、何にもできないんだ。これ以上、ここにいる資格もねえよ」

男の子は、今にも泣きそうな様子でした。私は思わず、口を挟みました。

「ちょっと待ってよ。そんなのあんまりだよ。ちょっと仕事ができないからって、追いだすなんて」

「仕方がねえだろ。ここはそういう決まりだ。それに、コイツを追い出すように仕向けたのは、紛れもなくコイツから仕事をとったお前だぞ」

私は思わず、「そんなこと……！」と声をあげましたが、そこで何とかこらえました。確かに、継ぐんの云っていることは正しいのです。でも、私はそんな不本意な結果には終わらせたくありません。私は少し考えました。彼が追い出されずに、すべてを丸く収められる方法を。少しの間の後、私はゆっくりと言葉を切り出しました。

「……この子は追い出させない」

「なに？」

「今日やってきた私に、明日からいきなりひとりりで仕事を任せるなんて無理でしょ。せめて、あとひとりぐらいつけてもらって、道具や食材の場所とか色々教えてくれたり、ご飯づくりの手伝いをしてくれる人がいないと」

継くんはやや顎を上げ、ナメた口きいてくれるじゃねえか、とでも云いたげな表情でこちらを見ている。

「で、どうしたいんだ？」

私も継くんを睨むような表情で答えます。

「この子には、私のご飯づくりの手伝いをしてもらおう」



3

私が料理を担当するようになって、幾日か経ちました。

私は野菜を切っている手を止め、ふと隣で作業をしている例の男の子（頼くんという名前のようです）を見ました。鍋からお湯が沸騰して吹きこぼれているのに、あさつての方角を向いてポーツとしています。

「頼くん、何やってんの！？ 鍋吹きこぼれてる！」

頼くんは目を鍋の方に戻し、大袈裟に驚いた顔を作ります。しかし、さつさと火を吹き消すなりすればいいのに、それからはただただうろたえるばかりで、何も行動しないのです。

「火を消せばいいでしょ」

私がそう云うと、頼くんは慌てて火を消そうと、息を吹きかけました。しかし、火はそれなりに強くなっており、息を吹きかけるだけでは消えないどころか、吹き込んだ空気に煽られて頼くんの方へ襲いかかってきます。彼は熱そうに顔を手でばたばたと叩いて、それから消火に悪戦苦闘しているようでした。

それでも、何とか消火には成功したようです。私は彼に向かってさらに指示を出します。

「もうそこはいいから、野菜切って」

ポジションチェンジです。頼くんが野菜を切り出す前に、私はふと思い立って、念押しの意味でこう付け加えました。

「指切らないでね。左手は熊の手だよ」

頼くんは思い出したように左手の形をグーに変えました。私が指示を出さなければ、また指を切っていたかも知れません。

あれから、この家の料理担当は私と頼くんになりました。

翌日、私は調理場に案内されました。私のもといた世界とは違って、ここでは水道もないしガスもないので、水は汲んでこなければいけないし、火はまきでおこさないといけません。しかし、不思議と食材は色々豊富にあるのでした。

この日から、私と頼くん共同でのご飯づくりが始まりました。しかし、頼くんは想像以上にやりにくい子でした。まず、私が云ったことをちゃんと呑み込んでくれません。何をしたらいいのか分からない、手が止まっていたり、あまり分からずに取り組もうとして、ぐちゃぐちゃになったりします。おまけに、何をやるうにも、ひとつひとつの作業の手際が悪く、失敗ばかり繰り返します。さらには指示もしていないのに勝手なことをして、かえってややこしい事態になるのもしばしばでした。

はじめは、どうしてこんなにできないのか、と苛立ちも覚えましたが、彼を観察しているうちに、時間をかけて慣れればどうやらで

きるようになるらしい、ということや、云い回しや表現の仕方にも、彼が理解できるものと理解できないものがあり、工夫して理解できるように伝えれば、ある程度は指示通りに仕事をこなしてくれることが、だんだんと分かってきました。それから、大変ではあるけれど、彼ともそれなりに協力し合っご飯づくりをすることができるようになりました。

私が頼くんの性質を理解できたのは、長年お姉ちゃんのお世話をしていたからだと思います。今でこそ、お姉ちゃんは私より大人になって、半分は自立した生活を送っていますが、高校を卒業するまでは、お姉ちゃんはずっと私に頼りつきりでしたから。正直云って、頼くんほどじゃないにしても、当時のお姉ちゃんには、彼と近いものがあつたような気がします。ですから、頼くんと作業をしていると、あの時の思い出が、ふと思い出されたりするのです。

幸いなことに、私の振舞う料理はこの家に住む男の子たちにも好評でした。おまけに、私が頼くんと少しは協調し合っご作業ができて、いることもあり、頼くんもとりあえずはこの家から追い出されずに済んだようです。よかつたよかつた…。

調理が一段落つきました。

「ふー。とりあえず火を止めていいよ」

危なっかしい手つきでしたが、頼くんは無事、火を止め終わります。

「とりあえずはお疲れさま。私、ちょっと水浴びしてくるね」

そう云って私は家を出て、裏にある川で水浴びをしていました。

水で調理中に身体についたすすなどの汚れを落としていたら、ふいに誰かの視線を感じました。首だけ振り返ると、草むらから誰かがこちらを覗いています。

「誰？　そこにいるのは！」

私は叫びました。すると、草むらからひとりの男の子が出てきました。同居人の潜くんです。

「へえ。よく気づいたもんだなあ。俺、誰にも気づかれずに潜んでることが、めちゃくちや得意なんだぜ」

潜くんは得意げにそう云いました。

「…私が何をしているのか分からないの」

私は怒って、彼にそう訊きました。私は今水浴び中で、もちろん身には何もまとっていません。潜くんに対して背を向ける感じで立っているし、腰から下は彼の死角になっているはずなので、見られたくないところまでは見えていないでしょうが、それでもいい気分はするはずがありません。

潜くんは相も変わらずニヤニヤしながらこちらを見えています。私はより一層腹が立ちました。

「あっちへ行つてよ。あんまりしつこいと、継くんに云いつけるよ」

「そう嫌うなつて。俺だって、お前の役にちよつとは立ってるんだ

からよ」

「…どういうこと?」

「お前の手伝いしてるのは、頼ばかりじゃないってことさ。ほら、家には意外に食材がそろってると思わないか。あれ、俺がその辺の畑とかから盗んできたものなんだぜ。食材調達って意味で、俺はお前の手伝いをしてるってことになるだろ」

「えっ…?」

潜くんの言葉は、私には衝撃でした。確かに、最初に調理場に入ったとき、こんな粗末なつくりの家にも拘わらず、食材が豊富にそろっていることが、何だか不釣合いに思えました。それらは、潜くんがどこから盗んできたものだというのです。

私は次の言葉が出せなくなりました。確かに、私たちが生きてゆくためには、盗むということは必要なことなのでしょう。けれど、盗むという行為は決して正しいといえる行為ではなく、おまけに私は盗んできたものを使って、料理をしているという事実が、私の心に重くのしかかってきたのです。

「まあ、頼が料理やってた頃は、何で苦労して盗んできたものを、こんなマズい料理にされるんだと思って、ヤル気もあんまり湧かなかったけど、お前はまあまあそれなりのモノにはしてくるから、またヤル気も出てきたってもんだよ」

この時の私には潜くんの云うことの内容がよく頭に入ってきてませんでした。そんなことお構いなしで、潜くんはさらに言葉を続けます。

「あとさあ、ひとつ訊いてきたいんだけど、何で頼なんかの肩を持つんだ？ あんなトロくて何もできない奴、庇っても甲斐ないだろ。俺はあんな奴、その辺でひとりでノタレ死んでもまったく問題ないと思うぜ。…まあいいや。さっさと水浴び済ませちまえよ。そんな無防備な姿でずつといたら、いまに襲われるぜ？」

潜くんはそう云って去って行きました。私はその後もしばらく呆然となったままで、持っていた手ぬぐいを落として、川に流してしまったことにも気づきませんでした。

夕食時。

私の食は進みません。

それに対して、周りのみんなは、食欲旺盛です。本当によく食べてくれます。

どうして、盗んできたものをこんなにも罪悪感もなくぱくぱく食べられるのでしょうか。彼らの神経を疑ってしまいます。盗んだ食材のもとの持ち主たちが、魂を自ら捨てた人たちだからでしょうか。でも、いくらそんな人たちだからって、彼らの持ち物を盗んでいい理由にはなりません。いいえ、むしろ盗むという行為自体、健全な魂を有した人間がすることなのでしょうか。

私の考えを、青臭いと思う人は多いかも知れません。しかし、私はそれでもそんな青臭い信念を捨てたくはないのです。

「どうした？ 全然食ってないじゃないか」

隣にいた頼くんが、私に声をかけました。

「うっん、ちゃんと食べてるよ。大丈夫」

そう私は答えました。頼くんは余計な心配をかけたくなかったか

らです。

私には、彼らの盗むという行為を否定する反面、彼らの幸せを奪いたくないという気持ちも起こっていました。せつかく、私の作ったご飯を美味しく食べてくれるのだから、そこに水を差すのは忍びない。もし仮に私がここで、「盗みなんてやめようよ」「みたいなことを云ったら、この雰囲気は台無しになってしまつてしまうでしょう。それはやっぱり何だか躊躇われることなのです。

しかし、せつかくのこの雰囲気は台無しにしてしまつような事態は、私以外の人間を発端にして引き起こったのです。

「本当に大丈夫か？ 何かあつたら俺に云つてくれよ。力になるからさ」

「ありがとう。でも、本当に何でもないから」

私はそう云つて、頼くんに微笑みました。頼くんの気づかいが本当に嬉しかったのです。内心、「頼くんじゃ力になれないよ」という気持ちもあつたのですが、それはあえて口には出さないようにしました。ところが……

「へっ、お前みたいな奴が、何の力になれるつてんだよ！」

私とは別に、こんな声をあげた子がいました。潜くんです。

「お前みたいに何にもできない奴が、偉そうな口をきくんじゃねえ。何の役にも立てなくせに、いっぱしの住人面して、飯まで大層に食いやがって。お前なんか、誰の役にも立たないのを恥じて、部屋の隅でひっそりしてればいいんだよ。俺なんか、毎日命がけで、



盗みに出てるんだ。それに対してお前は何だ。安全なところで、こんな可愛い女に世話してもらって、のうのうと暮らしてんだ。恥とも思わないなんて、腐ってらあ」

「おい潜！そのくらいにしておけ」

継くんが云います。すると、潜くんは「ケツ」と云って、外に出て行ってしまいました。

頼くんを見ると、悲しそうに俯いていました。私は、頼くんの肩に手をやり、

「大丈夫？　あまり気にしなくていいから」

と云いました。すると、頼くんは俯いたままで云いました。

「いいんだ。あいつの云うことももつともだ。俺あ、人並みの仕事もしてねえのに、ここにいる連中と同じような扱いをもらってる。不満が出るのも当然だ」

頼くんはのっそりと立ち上がると、潜くんと同じように、外へ出て行きました。

私は何だか悲しくなりました。立ち上がって調理場の方へ歩いていき、真っ暗な部屋の片隅に座り込んで、静かに泣きました。

-

翌朝、私は草むらに座り込んで、小川をぼんやりと眺めていました。

水がただ静かに流れていきます。流れに逆らうこともなく、先を急ぐこともなく、ただあるがまま、なすがままの姿で。

私たちも、この川の水のように、流れに身を任せていられたらいいのに…。

そんなことをぼんやりと考えていた時でした。

「おい」

ふいに後ろから誰かの声がありました。振り返ると、継くんがそこに立っていました。

「飯の用意はどうした」

私は前に向き直って、黙っていました。

「飯づくりはおめえの仕事だろ。自分の役割はちゃんと果たせ」

「…分からないの」

私はぽつりと云いました。

「何だと」

「みんな私の作ったご飯を喜んで食べてくれているようだけど、でもあれって盗んだもので作ったものでしょ。よくないことをして得た喜びって、本物なのかな。少なくとも、私はそんなもので喜びを振舞いたくない。それに、潜くんが頼くんに対して思ってたみたい

に、仲間同士もお互い認め合わず、いがみ合っている部分もあるし。そんな人たちを私は本当に喜ばせてあげることができるのか。そう思うと、何だかやりきれない気持ちになって…」

「何というか、お前はアレだな。ガキだな」

継くんは嘲笑するように云いました。私は少しムツとして継くんを見ました。

「きれいごとじゃ生きていけねえんだ。生きていくために、盗みが必要なのだとしたら、それは迷わず実行すべきだ。ましてや、この家には多くの人間が住んでいる。俺だけの問題じゃない。俺にはそいつらを生かしてやらなきゃならないという義務もあるしな。手段など選んでる余裕などねえんだ。あと、仲間の中で認め合わない奴がいるなんて、集団の中では至極当たり前の話だ。誰かといがみ合っても、集団で調和を崩すことなく、自分の役割を果たしていくってのが望ましいんだ。逆にそれができない人間は、集団生活なんてすべきじゃない。ガキのままごとじゃあるまいし、“みんなで仲良くしましょう”なんて、バカげてるな」

「で、でも…」

私は口ごもってしまいました。確かに、継くんの云うことはおおかたもつともなのです。ただ、どうしても私には納得できませんでした。

「どつやら、お前の生きていた時代は、とても恵まれているらしいな。青二才の戯言をほざいても生きていけるぐらいなんだろう。そして、お前の身の回りにいた人間も、そんな甘っちょろい連中ばかりなんだろうな」

「そんなことない…！ それ以上は許さないよ」

私は激昂しました。私のことを云うのはいい。でも、私の最愛の人を悪く云うのは許さない。私のお姉ちゃんは、数々の苦難を乗り越えながら、たくさんの人々を救った人間なのです。

「そういえば、お前の慕ってるのは、自分の姉貴だったか。そいつが、この世界に来たら、いったいどうなるだろうな。それを考えると、笑えてしょうがないぜ」

「何ですって!?!」

私は怒りで我を忘れ、継ぐんに飛びかかりました。いえ、実際には飛びかかる前に、継ぐんに取り押さえられました。片手で頬のあたりをがっちりつかまれたのです。そして、そのまま草むらに押し倒されました。

「いや、やめてよ、変態!」

私はこう叫んで、じたばた暴れました。すると、継ぐんは私の身体を抑え込み、手で口を塞ぎました。そのまま私の顔の傍まで自分の顔を近づけて、押し殺すような声で云いました。

「いいか。生きるか死ぬかの時に、なりふりなんか構っちゃられないんだよ。生きることに必死になってたら、余計な考えをもたげるといふ本筋を見れないような奴はカスだ。この世界で生き永らえたのなら、このことをよくアタマに叩きつけておけ」

継くんはそう云うと、私の身体を離して、立ち去りました。

その場に取り残された私は、怒りと悔しさと恐さで、涙が溢れ、止まらなくなりました。

5

「どうした？」

声が出たので振り返ってみると、そこにいたのは頼くんでした。

「頼くん…。一晩中どこに行ってたの！？ 心配したんだよ！」

頼くんは、昨日家を飛び出したきり、今まで戻ってこなかったの  
でした。私は、さっきまで泣いていたことも忘れて、頼くんに怒っ  
て云いました。

「あ、ああ、悪かった。そんなことより、変なもの見つけたんだ」

と、頼くんは適当に謝罪の言葉を述べた後、急に話を変え、手に  
持っているものを私に見せました。それは、私の携帯電話でした。  
そう云えば、この村に来てから、私はケータイを見ていませんでし  
た。おそらく、この村に迷い込んだ時に落としてしまったのでしょ  
う。ということは、ケータイが落ちていた場所に、もしかしたら元  
の世界につながる出口があるかも知れない、私はそう考えました。

「ねえ、これどこで見つけたの？ 案内して」

「あ、ああ…」

私の強い口調に、頼くんはややためらいがちに答えました。

頼くんの後ろについて、随分と歩きました。思えば、ここは魂を失った人たちが住む集落の近くです。それに気づいても、私は頼くんに「帰ろう」とは云いませんでした。この先に、出口があることを願い、そして自分がそこからもこの世界に還れると信じていたからです。

「ここだよ」

頼くんは急に立ち止まって、地面に指をさして云いました。察するに、「ここにお前のケータイが落ちていたんだ」ということでしょう。まあ、頼くんに携帯電話という概念はないでしょうが。

頼くんのすぐ横には、大きな岩があり、片側、ちょうど頼くんがいる側、にぽっかりと穴が開いています。穴のすぐ近くに私のケータイが落ちていたということから考えて、この穴が私たちのいた現世と、この世界をつなぐ通路の入り口なのかも知れません。

私はその穴に入ってみました。「お、おい」と頼くんの呼ぶ声がしましたが、それには取り合わずに、穴の中を探ってみます。もしかしたら、長い通路になっているのかも知れない、と思いましたが、すぐに壁にぶち当たりました。暗くて目ではよく見えなかったので、辺りを手で触りながら、先に進めないか調べてみましたが、どうやらこれ以上道はないようです。

私は諦めて、穴から出てきました。落胆しているのが顔に出ていたようで、頼くんが心配そうに「どうした？」と訊いてきました。

「この穴の中に、還れる道があるかと思ったんだけど、ダメだったみたい」

すると、頼くんは少し悲しそうな顔をして、云いました。

「そんなに還りたいのか。お前、俺たちが嫌いなのか？ 一緒にいるのが嫌なのか？」

「うっん、そんなことないよ。みんな大好き。でもね…」

そこから私の言葉が止まりました。異様な気配を察知したからです。振り返ると、魂を失い、穴ぼこみたいな目をした人たちが、鎌や鍬などを持って、そろそろと私の方へやって来ていたからです。

「逃げるよ！」

私はそう云って、頼くんの手を引いて走り出しました。振り返ると、連中も私たちの後を追ってきています。私はもどかしさを感じました。頼くんの足は、私よりも遅いのです。手を引いて走っている分、私の足もどうしても遅くなってしまいます。かといって、手を離すわけにもいきません。

そうするうちに、頼くんの足がもつれて、彼は倒れ込んでしまいました。見れば、連中はみるみるうちに、私たちのもとへ迫ってきています。もうだめかも…、と私は思いました。そこへ、ひとりの男の子の姿が、突如、私の目の前に飛び込んできました。

潜くんです。



「はやく、コイツを連れて逃げる！」

潜くんが云いました。

「潜くん…」

「いいから、ココは俺に任せろ！」

「潜、お前…」

ようやく起き上った頼くんが云いました。

「てめえ、モタモタすんな！ こんな時にまで、迷惑かけてんじやねえ！！」

どうすればいいか、考えてる余裕なんてありません。

「潜くん、ありがとう！」

私は短く叫んで、頼くんを連れて走り出しました。

走りながら、後ろを振り返りました。目に飛び込んできたのは、連中に向かっていった潜くんが、連中にやられる瞬間でした。頼くんに見せちゃいけない！ そう思った私は、私は頼くんの手を引いていない方の手で、頼くんの目を覆いました。

「頼くん、後ろを見ちゃダメ…！」

私の視界は、涙でぐにゃぐにゃになりました。それでも、走るスピードを緩めるわけにはいきません。

そのうち、頼くんが息も切れ切れ、という感じで云ってきました。

「俺…、もうダメだ…。お前、ひとりで…逃げて…くれ…」

私は目を怒らせて頼くんに云いました。

「こんな時にまで甘ったれないで！ 頑張って走りなさい！！」

そうなのです。ここで頼くんを手放すわけにはいきません。潜くんが自分の命を引き換えに守ろうとした、私たちの命なのです。何としても、私たちが逃げ切らないと、潜くんの死が、無意味なものになってしまう。

涙の粒が私の目から離れ、後ろへと流れていきます。頼くんは一瞬ビックリしたような表情を浮かべましたが、それからグンと走るスピードが速くなりました。

どれだけ走ったでしょう。私たちは、何とか逃げ切りました。

家に帰って、しばらく潜くんの帰りを待つてみました。

けれど案の定、潜くんは帰ってきませんでした。

私は、涙が止まりませんでした。私の横にいる頼くんも、今にも泣きそうな表情でうつむいています。

そして、悲しいという感情を、その表情の裏に隠している人がいました。

それは意外にも、継ぐんでした。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9811v/>

---

心をつなぐ愛の糸【平沢 憂の物語】

2011年10月26日13時05分発行